筑波大学日本文学会会報

第8号

昭和58年12月

筑波わが冬の歌……平岡敏夫……一
研究室だより……三
卒業生だより……四
日本文学研究室教官学生名簿……十二

筑波わが冬の歌

平岡敏夫

筑波の冬が来ると思い出されるのは、十五歳の少年のころ、うたった歌の一節である。題名も歌詞もほとんどは忘れてしまっているが、メロディーだけはおぼえている。第一学群棟を過ぎ、桐葉橋を目ざして、つめたい風に抗しつつ、小さな坂をのぼりかけるときなど、自然と口をついて出てくるのは次のような一節である。

筑波おろしの朝な夕
教えを守り、身を清め
……

もうこのあとは出てこず、メロディーばかりがつづくだけで、まことに他愛もないことであるが、敗戦を間近にした昭和二十年の、春なお寒い校庭で、だれに教えられたのか、歌っていた歌なのである。そのころは筑波の名は知ってはいたものの、山に登ったことも見

たこともなかった。ただ、広い飛行場を横なぎにして兵舎の前まで吹いてくる風が、筑波おろしを想像させるばかりだった。

筑波おろしは、筑波山麓に吹くのではなく、それより南の関東平野へと吹きおろす風だという説がある。私が、右の歌を教えられた場所は埼玉県入間郡所沢町（現在所沢市）というところで、明治四十四年四月、日本にはじめて飛行場が設けられた土地である。「集（つど）うわれらが希望の窓に、朝な夕なに血は湧きて」とも歌いつつ、筑波おろしの朝な夕、飛行機の操縦に整備に、全国から集まって来た青少年が訓練にはげんだ土地である。かつての飛行場あとは航空記念公園となり、公団住宅や防衛医科大学校・郵便局・電話電報局・税務署・小中学校等も並んで、所沢市の新市街を形成している。昔のおもかげは、老桜の並木や、翼を抱いて空を仰ぐ三人の少年兵の像などに残るばかりだが、払いさげ品らしい双発のプロペラ機も置かれていて、昔のように、よもぎやクローバーのみどりはあざやかだ。数年前、彼岸の草餅にと、よもぎを一家で摘みにここへやって来たこともあったが、戦争中のことが想像できないぐらいに平和の光景のようにみえて、その実、あまりかわりはしないのだ。つまり、当時、グラマンやP51の空襲を毎日のように受けながらも、やはり草は萌えていたし、ひばりは高くさえずっていたのだった。

戦争が日常化していたと言えばそれまでだが、同じことを逆に言えば、戦争が日常化するからおそろしいのだ。満洲事変の前年に生まれ、日支事変（蘆溝橋事件以後）のころ、小学校二年生であり、大東亜戦争（太平洋戦争）開始の年が六年生だった私などの世代にとっては、つねに戦争であり、戦争は日常であった。戦争を日常的なものとしてしまう時代、その感覚はたしかに存在していたのだ。このことを思い出させるのが、たとえば、さきの「筑波おろしの朝な夕」の歌なのである。この歌の一節やメロディーに、私が郷愁を感じていないと言ってはウソになるだろうが、それよりもこの「筑波おろしの朝な夕」は、妙にかなしいのだ。〈筑波おろし〉ということばが持つ寒さ、冷たさがかなしさを誘うのだろう。しかし、それだけではない。〈筑波おろし〉が日常化していた戦争の記憶を分かちがたく結びついているからだと言うこともできるだろう。だが、やはりそれだけではない。

当時、名のみ知っていても未見の筑波山同様、筑波おろしも、春先から初夏まで所沢に暮らした私にとっては、直接体験したものではなかった。しかし、遠く瀬戸内の故郷をはなれて、きびしい軍隊規律とふじゅうぶんな食糧—他人のめしの盛りがつねに気になるような日々のなかで、けっして大声では歌われることのなかった「筑波おろしの朝な夕」の歌—怨念とも郷愁ともつかぬ、一種やりきれないかなしさが〈筑波おろし〉にはこもっていたような気がする。「筑波おろしの朝な夕、教えを守り、身を清め……」とは今日では

失笑ものだろう。「教えを守り、身を清め」とはまるで無縁の戦後の日本であったからだ。日本の大義を信じ、一死もって君国に報いるという覚悟が当時の私たちにはあったことは事実だ。批判力のない十五歳という年齢にもよるだろう。だが、〈筑波おろし〉と同じように「教えを守り、身を清め」と歌うところにもゆえ知らず、かなしさのようなものがつきまとっていた。

筑波おろしは筑波山麓を越えて吹くという。筑波大学は創立十周年を迎え、今は私にとって〈筑波〉は既知のものとなったようだが、これからも「筑波おろしの朝な夕」と、私はやはり口ずさみつづけるだろう。そして〈筑波おろし〉のかなしさをひとり思い起こすだろう。〈戦争〉が日常化しつつあるとすれば、また、〈筑波おろし〉が〈筑波〉に吹かぬという保証もないとすれば、私はいっそうこの〈筑波わが冬の歌〉を歌いつづけたくなるにちがいないからである。